

平成二十二年前期日程 入学試験問題

小論文 C

教育学部

学校教育教員養成課程

言語・社会教育系

国語選修……………1～6ページ

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- ② この冊子には課程・選修・コース別に問題が出されているので、選択を間違えないようにしなさい。横書きの問題は裏表紙から始まります。
- ③ 解答は、別紙の解答用紙に、指定字数に従って、縦書きで記入しなさい。
- ④ 受験番号は、解答用紙一枚ごとに指定の欄に記入しなさい。
- ⑤ 解答用紙の「問いの番号」の欄に、「問一」または「問題一・問一」のように記入してから答えなさい。
- ⑥ 冊子内の課程・選修・コース別の中表紙に注意書きがあるので、解答する前に必ず読みなさい。

学校教育教員養成課程

言語・社会教育系 国語選修

注意

問一・二・三の(1)は解答用紙(その一)を、問三の(2)は解答用紙(その二)を用いて答えなさい。

問題 以下は、佐藤学(教育学者)と谷川俊太郎(詩人)の対談の一部である。これを読み、後の問に答えなさい。

佐藤 「間がもたない」ということが、よくいわれますでしょう。あれはきつと、相手と自分とのあいだで息づかいのようなものが共有されていないから、間がもたないんでしょうね。

谷川 ふつと間があいたとき、その沈黙に耐えられるか耐えられないかは、一種の自己充足の程度にかかわっているんじゃないでしょうか。自己充足して孤独を見つめられるか、つねに他に依存して孤独から逃れようとしているか、その違いなんじゃないかな。あるいは、自分の考えていることや、そのとき心に浮かんだものを全部ことばにせずにはいられないというも、人に受けとめてもらいたいかからかもしれないけれど、自己充足してないからかな、と思います。そういう人と話すとき、他者というものが見えてない、あるいは他者のことを考えてくれないと感じますね。

若くてまだ未熟な人の詩にも、それに似たものを感じることがあります。つまり、ほとんど垂れ流して自分のいいたいことをバーツと出していて、作品として成立していない。たんなる愚痴ぐちみたいに見える。そういうものは騒さわがしいんです。どんなに切実であっても、ある種の騒さわがしさをともなっています。

詩のことばが作品として成立しているかどうかは、ほとんど直感で判断するしかないんだけど、ひとつには、そのことばが作者を離れて自立しているかどうか。そのように自立したことばというのは、書いた人間の騒さわがしさから離れて、たとえどんなに饒舌じょうぜつに書かれていても、ことば自身が静かになってそこに在ある。逆に、たつた三行の詩でも、騒さわがしい詩というのがあります。詩というのはいわば芸がないと成立しないもので、ほんとうは、芸があつてことばが自立しているほうが、実際には他者によく伝わるはずなんです。「自分はこんなに苦しんでんだ」ということをいうだけでは、意外と他者には伝わらないものです。

いま、だれもが「オレが、オレが」と自分を表現しようとしていることが、たぶん騒さわがしさのいちばんの源なんじゃないでしょうか。じゃあ、騒さわがしくないことば、沈黙をどこかに秘めたことばとはどういうものかを考えたとき、それは個人に属

しているものではなくて、もつと無名性のもの、集合的無意識のようなどころから生まれてくるものだと、ぼくは思う。詩というついで、高村光太郎とか宮沢賢治とか中原中也とか、天才のほうに目を向けがちだけれど、その裾野すそのには、たとえばわらべうたのような完全にアノニム（作者不明・匿名）な詩の世界があるんです。マザーグースなんかもそうですね。そういう無名性のことばに、ぼくは早くからあこがれていましたね。

佐藤 しかし、そうなると思わずかしいのは、一方では無名性として自立したことばでありながら、もう一方では具体的な生身の身体の声としてつながっていかねばならない。

谷川 詩を書くときには、いくら自由詩でも、やはりふつうの会話や散文とは違うことばのレベルへ入っていきます。そこでは、私生活的な私ではない、もつと他者と意識の下のほうでつながっている、「他者と通路のある私」というのが出てきます。だから、多くの人が詩を意識の産物だと思いついて、詩ってというのは実際は意識下の産物なんですよ。

佐藤 意識下の、ことばになつていない部分をことばにしていく、それが詩人の役割なのかもしれません。これからの芸術は、だれの作品かということより、作品そのものが佇立ちよりする（注一）ような、無名性を回復しなくてはならないんじゃないでしょうか。

② 逆に、科学や学問のことばは、それに携わり、創りだし、組み替えた人間の軌跡や経験と重ねあわせて、もつと身体化されていかないといけないのではないかと思います。

谷川 民芸運動の柳宗悦やなぎむねよしが「自力の道」と「他力の道」ということをいっているんですが、自力の道というのは自分でがんばってある高みにいく、いわば天才たちの道。他力の道はたとえば民衆芸術であって、名もない人たちが日々のたつき（注二）として毎日、絵を描いたりしている、それがすばらしいんだと。その他力の道をとっても、自力の道と同じ高みに達することができるんだと、柳さんはいうわけです。

そういう他力の道というのが、いま、すぐ見つけにくい時代ですよ。伝統は途切れてしまっているし、共同体は壊れてしまっているし。だから、みんな自力でがんばっている。それはすごく不幸だなあと思うんです。現代芸術なんか、もうだいたいぶまえから出口がないでしょう。商業主義とも結びついていて、無名性なんかとんでもない、自分がスターにな

らなきゃ生活できない、みたいなことになってますからね。

佐藤 もっと違ったことばの世界・関係を築くための仕掛けをつくらなければいけませんね。思想の実践として、あいさつを交わすことや文章を書くことや、日常のことばのレベルから始めなければいけないと思います。今後、谷川さんはどういう戦略を考えられているのか、うかがいたいですね。

谷川 ぼく、そういうのぜんぜんないから(笑い)。自分のなかではまだ書きたくなること、書いて楽しいことはあるだろうと思つてますけどね。でも、いま、詩を書くことよりもむしろ、友人との日常的な会話のようなもののほうへ興味があつていきますね。話す相手によつて、会話の内容も、ことばの肌ざわりも違つてくるし、自分の口調も変わる。日常会話は記録されずにすぐ消え去つてしまうものだけど、そこでどこまで深いところで話ができるかというようなことに関心があります。それはもちろん、相手にもよることだから、自分だけでいくらがんばつたつてだめなんだけど。

佐藤 詩人で哲学者の篠原資明しのはらもとあきさんが『言の葉の交通論』(五柳書院)という詩論を書かれていて、その序論でおもしろいことをおっしゃっているんです。コミュニケーションのあり方を四つにわけて、一つめが「単交通」、つまり一方通行の語り、二つめが「双交通」で相互理解の語り、三つめが「反交通」で遮さへられる語り、四つめが「異交通」ですれちがう語りです。

それを読んで考えたんですけど、ぼくらは戦後民主主義のなかで、双交通の語りだけをよしとしてきたんじゃないか。単交通はまずい、遮られる反交通もまずい、異交通はもつてのほか、すれちがつて話にならないと。教育の世界でも家族の会話でも、お互いが通じあう相互理解のことばだけを特権化してきた。つまり、かみあわないことば、拒絶のことば、憤りをぶつけることばなどの価値を排除してきたんですね。

でも、それらがぜんぶそろつてはじめて、人と人とでしか交わせないことばの世界がある。そこまでおりたとき、すべてわかるか、さもなければまったくわかりあえないというコミュニケーションではない、ことばの世界が広がってくる。教室の会話であれ、親子の会話であれ、友人や恋人の会話であれ、右往左往したことばの厚みというものが、会話を支えるのだと思います。

谷川 ぼくらは日常生活のなかで、あるていど親しい人間とのあいだでは、さっきの四つを終始やっているはずなんですよね。

佐藤 とくに必要なのは異交通の語りだと思います。「わかりあえるはずなのに、わかってもらえない」というわがままな意識を捨てて、まことしやかにいわれる相互理解・他者理解の神話を、一度全部うそっぽちだと疑ってみることが必要です。

谷川 ぼくはときどき、老人ホームみたいところで詩を読むんです。認知症の人はぜんぜん聞いてないんですけど、詩を読んでみると、歌をうたいだしたりする人がいるの。何かに共感しているわけですよ。あるいは「あなた、お上手ね」なんてほめてくれたりする。そういうすれちがいつて、すぐくおもしろい。詩のことばにはきつと、ほかのジャンルのことばにくらべて、からだ共感する余地があるんですね。

認知症の人の会話って、二人がぜんぜん違う話題で、えんえん一時間でも二時間でも話していたりするっていうでしょう。それは意味の世界からみればまったく無意味なんだけれど、人間同士の交流ということからいえば、それで十分成り立つ大事なことだと思えます。恋人同士の睦言むつごなんていうのもそうですね。人間はそういうことばを実際には使っているのに、なかなかそういうものと公的な言語を、自分が使うことばとして結びつけて考えない。プライベートなことだって切っちゃう。でも、それこそ睦言や夫婦ゲンカ、友だち同士の会話みたいなものから詩や小説などまで、はつきりと地続きなんだと思いたいですね。

佐藤 一所懸命に話しあっても、すれちがって帰る。だけど、「ああ、会えて、よかったよな」と思うことがあります。もしかしたらきょうの対談も、そういう幸せな異交通だったかもしれない(笑い)。

(佐藤学『佐藤学対談集 身体ダイアログ』(太郎次郎社 二〇〇二年 九三〜九八頁 一部略

また表現を改めたところがある)

注一…たたずむこと。しばらくの間たちどまること。

注二…てがかり。手段。特に生活を支える手段。

注三…むつまじく交わしあうことば。

問一 — 線①、谷川が「騒がしい」と表現した作品(詩)はどのようなものか説明しなさい。(二〇〇字以内)

問二 — 線②、佐藤は「科学や学問のことばは、…もつと身体化されていかないといけない」と言っているが、これはどのようなことを意味しているのか、自分のことばで説明しなさい。(二〇〇字以内)

問三 (1) この対談では、「ことば」のあり方についてどのような指摘がなされ、それについてどのような提案がなされたか、まとめなさい。(三〇〇字以内)

(2) その指摘や提案をめぐって、あなたの意見を述べなさい。(五〇〇字以内)